当院の内視鏡室における放射線技師の業務参加への試み

社会医療法人　祐愛会織田病院
外来・手術センター　○山本衣里子、重松かおり
消　化　器　内　科　　松永　圭司、坂田奈津子、竹内　祐樹
長妻　剛司

【はじめに】

内視鏡技師の資格は看護師や臨床検査技師、臨床工学技士、放射線技師などが取得できる資格であり、多くの施設の内視鏡室で多職種が協力し、日々の検査を行っている。近年の内視鏡検査の増加、特にERCP（endoscopic retrograde cholangiopancreatography：内視鏡的逆行性胆管膵管造影）の増加に伴い、内視鏡検査や処置に放射線技師が介入する機会が増えてきている。当院でも内視鏡検査に興味を抱く放射線技師がおり、本格的な内視鏡室業務への参加を計画した。

【目的】

当院の内視鏡室は外来・手術センターに配置されており、看護師は一般外来、救急外来、手術室、アンギオ室の業務と兼務している。日々の勤務状況や業務形態により担当スタッフが変わり、固定するのが難しい状況であった。内視鏡技師の育成という医師の要望と多職種連携という病院の方針が合致し、今回放射線技師の内視鏡室業務への参加を行った。

【現状】

当院の内視鏡室は検査室を２室、透視室を１室有しており、通常医師２名、看護師３名、看護助手１名で業務を行っていた。放射線技師は放射線科の業務と兼任ではあるが、看護師１名に代わって固定スタッフとして勤務の調整がつく限り内視鏡業務に関わっている。看護師１名はリーダーとして内視鏡室内の調整、予約管理や機器・物品の管理を行う。他１名と放射線技師は各部屋の第一介助者としての記録や請求入力も担う。放射線技師に対しては業務手順に沿ってオリエンテーションを行い、はじめは洗浄や処置に重点を置いた教育を行い、その後第一介助者による指導と協働へと移行した。感染対策・医療安全については入職時の教育、院内の定期的な学習会へ参加し、また内視鏡室における感染対策、侵襲や偶発事故についての学習を行った。上下部の検査内視鏡の介助を優先的に行い、その後医師の指導協力も得て内視鏡治療の直接介助技術の習得まで順次行うようにした。技術習得チェックで現状を把握し、リーダー看護師が共通把握できるよう日々評価を行った。現在はEMR（endoscopic mucosal resection：内視鏡的粘膜切除術）やESD（endoscopic submucosal dissection：内視鏡的粘膜下層剥離術）、ERCPの第一介助なども行いながら、内視鏡技師免許習得を目指している。また夜勤業務の際には緊急処置の応援として参加している。

【結果】

薬剤の投与など一部限定される処置はあるものの、放射線技師でも滞りなく内視鏡業務を執り行うことができており、また夜勤就業時の緊急内視鏡時にはマンパワーの充実につながっている。一方で放射線科業務と兼任しているため、内視鏡業務に関われる時間が限定されており、技術の習得に時間を要している。

【今後の展望】

今後も取り組みを継続し、リーダー業務などへの拡大や人員のさらなる充実を図っていきたい。そのためにも各職種に応じた教育ツールや評価方法が必要となると考えられ、長期での教育計画の作成を行い、今後の育成を充実させ、最終的には多職種での業務連携を行うことで安全で円滑な質の高い医療の提供へと繋げていく。